

書評

代田智明『現代中国とモダニティ——蝙蝠のポレミック』
(三重大学出版会、2011)

水羽 信男

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻のスタッフである著者の専門分野は、「近現代中国文学と思想」で『魯迅を読み解く——謎と不思議の小説 10 編』（東京大学出版会、2006 年）などで文学研究をリードしてきた。その意味で歴史学を学んできた評者が、本書を取り上げることは無謀かつ著者に失礼なことであろう。しかし本書の帯には「現代中国に関する人文学を批評する、論争的対話：ポレミック」「いま『中国像』『モダニティ』『主体性』を問い直す」などの文言が並ぶ。筆者は自らの研究の目標を、近現代中国を人文学的に検討することにおいているのである。とすれば、人文学の一分野である歴史学の立場から、評者なりに問題を論ずることも、まったく無意味とは言えまい（歴史学を社会科学と捉える立場もあるが、この点について、ここでは触れない）。

本書はこれまで著者が書いてきた書評など 16 編を 4 部にまとめ、まず自らの問題意識を明示し（Ⅰ「歴史認識」）、それを学問の方法に昇華させることを宣言したうえで（Ⅱ（「地域文化研究」）、その核心部分を説明し（Ⅲ「文化・思想」）、最後に具体例を示している（Ⅳ「魯迅論と近代の主体」）。以下では紙幅の関係もあり、本書の主要な論点に絞って紹介しておく。

まず著者が論じるのは、なぜ中国を考えなければならないのか、という問いである。その答えはまずは中国が密接な関係を持たざるを得ない重要な隣国であるにも関わらず、日本にとっては大きな「謎」を抱えていることに求められる。そのうえで著者は、社会科学的な経済学や政治学の現状分析がどれだけ進んでも、中国人の「精神構造と歴史文化的経緯」を重視しない議論は「危険」だと指摘している(2 頁、以下、括弧内の数字は本書の頁数)。この点に人文学＝歴史・思想・文学を重視する著者の特徴が、明瞭に示されている。そしていま一つ、中国を取り上げる理由として著者が指摘するのは、日

本人には中国に対する憧憬と侮蔑とがない交ぜになった感覚が歴史的に形成されてきたのであって、中国をどのように語るかは、実は日本人自身のあり様を反映するものだという点である(6)。中国は日本を写す「鏡」であり、日本人の中国論から日本の「今」が明示されるということになる。

本書の最大の特徴は、狭い中国論に収斂されないことである。とりわけ著者が強く批判するのは、西洋の非西洋社会への侵略・蔑視の裏返しとして、中国の歴史を西洋の歴史に匹敵するもう一つの歴史発展のモデルとする溝口雄三の議論であった(181 など)。著者の溝口批判は、根底では「具体的で人間的な悩みと痛みを抱えている」他者と対話し、他者との相互理解を求めることをなにより大切に考える、著者の人間観に起因すると評者は感じている(1・2)。というのも、中国、欧米を問わず、誰かを特権化することでは、「倫理」つまり自由と責任の問題は解決できないからである。著者にとって最も大切なことは、「倫理」な人間を再生させることであった(12)。こうして著者は中国の特殊性を直視しながらも、中国を素材として、モダニティと主体性という現代世界に普遍的な問題群について思索する。

著者にとってモダニティとは、「信奉」してはならないものである(114)。なぜならばモダニティを象徴する「自由」「人権」「平等」といった価値の実現のために、大国の侵略が合理化され、個の尊厳が踏みじられた歴史は枚挙にいとまがないからである。著者にとって、こうした数々の悲劇を繰り返した根源こそが、進歩史観から善きものとみなされてきたモダニティであり、その本質は「世界を同一の基準で画一的に覆い尽くそうとする運動」＝グローバル化であった。そしてこの運動は「進歩」と「向上」を絶えず人びとに強いている(12、94 など)。こうしてグローバル化が進むなか、我々はただ一つの幸せ＝経済的な豊かさを実現するために、国内に抑圧されるべき少数者を恒常的に作り出して「国民」的な団結を実現・維持し、対外的には「敵」と(時に軍勢力を動員して)闘いつづけるのである。

このモダニティの陥穽を克服する道は、「モダニティの良質部分」を取り出すことだと著者はいう(270)。まさに竹内好が日本の再生の唯一の道として、「ウルトラ・ナショナリズムのなかから真実のナショナリズムを引き出してくることだ」と主張したのと同じように(260)。こうした困難な課題に立ち向

かう戦略が、著者のいう蝙蝠^{こうもり}あるいは鶴^{ねえ}という、対立するどちらの側にも容易に与せず、批判すべき点は批判し続けるという立場である。それは「近代性とナショナリズムに引き込まれずに、それを武器として近代とナショナリズムを批判する」ための現実可能な唯一の作法と位置づけられている(77)。著者は「人権」や「自由」などモダニティを象徴する価値を信じないのではない。こうした価値が特権化し、人びとを抑圧することを怖れるのである。

こうして著者は、自由と責任を担う力が溶解し倫理が失われた今日的な閉塞状況を打破するために、主体性の再構築の方法を模索してゆく。その主体形成論の前提は、人が「私は誰か？」という問いに答えることができるのは、第一に「あくまで他人との関係性によってであり、第二に〔アイデンティティは〕「形成される」ということである(147-8)。ここから「他者」に開いていくことのなかにこそ、閉塞された私たちの「知」の可能性は託されているのではないかと主張が導かれる(66)。なおここで言う「他者」とは、自分自身のなかにも存在しており、誰もが「世間様」から排除されうる特殊を抱えている。そのことを自覚することが、自分が多数者として少数者の「痛み」に無自覚であったことに気づくのと同様に、重要だと著者は考えるのである(316)。人が「他者」と出会う過程で憎悪や衝突が起こっても、それは主体性を回復するチャンスであって、癒しに至る道となる、と著者は説く。

以下では「地域文化研究」に即して若干の感想を述べ、書評としての責めをふさぎたい。著者によると地域研究とは異質な組み合わせによって、その価値を増すものと理解されている。「組み合わせ」とは、複数の国や地域を比較し、関連づけて考えるような学問のありようである。具体的には日本・韓国・中国・モンゴル・ベトナムなどについて、二者間あるいは三者間の問題として考察することが想定されている(84)。また「社会史・経済史としての歴史学、社会学、文化人類学、思想哲学を総合したもの」が地域文化研究だとも指摘されている(169-170)。

「地域研究」の定義について、評者はおおむね賛成である。ただ後者で政治史としての歴史学を欠落させたのは、理解に苦しむところである。こうした批判は揚げ足取りだろうが、たとえば本書には「植民地主義の帝国主義的拡張と被植民地側の抵抗というコロニアルな構図」との表現がある(270)。た

しかに歴史学界にも中国を「半植民地半封建」と定義してきた時代があるが、日本ではこの定義は否定されて30年を経ている。20世紀前半の中国は独立国であったし、相応の国際的な地位を占め、国内の統合と資本主義の発展を遂げていたのである。今日の歴史学はこの点を踏まえて、中国の「抵抗」の意味を問うている。著者にとって中国における「抵抗」の象徴は魯迅なのだろうが、当然、彼とは異なる立場の知識人のさまざまな取り組みがあり、相応の成果をあげ、また挫折も味わってきたのである（村田雄二郎『リベラリズムの中国』有志舎、2011年）。

また本書からは中国の一般民衆の姿は見えてこない。たしかに哲学・文学に力点を置く本書に、こうした批判をすることは、「無い物ねだり」である。だが魯迅が象徴的に示すように知識人自身にとっても、民衆とどう関係を持つかは重要な論点であった。著者が「郷里空間」なり「高度に細分化した細胞状の構造」について論じるのならば(165、169)、その空間・構造を構成した民衆を歴史的に理解する努力も必要だったのではないだろうか。

中国研究の成果だけでなく、柄谷行人や廣松渉、井上真幸などまで縦横に駆使して議論を展開する本書から、評者もまた大いに示唆を受けた。本書は中国を人文学的に考えたい人びとに有益な一冊である。ただし著者が示唆するように歴史学の本領は、「多様性、多面性、複眼的現実把握と理論形成」にあり(236)、著者は自らの立ち位置を蝙蝠や鶴にたとえたが、評者の実感からいけば歴史学そのものが、蝙蝠的であり鶴的である。歴史学者は「現在の視点から、過去をふり返って」歴史を描く者ではあるが(223)、自分を語るのではなく、史料に基づきその時代の意味を再構成する者であろう。こうした中国近代史の成果に学びつつ、地域研究として本書の提起するモダニティ・主体の問題をどのように論じるのか、それは我々に課せられた問題である。

最後に言わずもがなのことを、自戒も込めて指摘しておく。本書では現代思想固有の言い回しが多用される一方で、「入門」が「人門」となるなど単純なミスも見られる(257)。また人文学は高く評価される一方で、「人文主義的な」立場は極めて厳しく批判される(116)。丁寧に読めば理解できることで、これらの点は本書の価値を貶めるものではない。が、初学者のための表現上の工夫も必要だったのではなかろうか。(nmizuha@hiroshima-u.ac.jp)